種別	タイトル	著者	掲載ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	ミャンマー産陶器の化学分析	佐藤 由似(奈良文化財研究所) 田村 朋美(奈良文化財研究所)	5-23	14~17世紀のミャンマーと日本で出土したミャンマー産陶器のX線分析および鉛同位体比分析を実施した。分析の結果、白釉と緑釉は鉛釉であり、白釉は錫石(SnO2)によって白濁していることが分かった。一方、黒釉はカルシウムの多いアルカリ釉であった。アラカン地方ではコバルトで着色されたアルカリ釉の藍釉陶器が確認された。鉛釉の鉛同位体比分析を実施した結果、先行研究でタイのソントー鉱山の鉛が使用されたと考えられているN領域に一致した。一方、新たに入手したミャンマーの鉛鉱石も同じくN領域の鉛同位体比を持つことが分かった。ミャンマー産陶器生産に使用された鉛原料産地はタイだけでなく、ミャンマーにも存在する可能性が示された。	ミャンマー産陶器、鉛同位体比分析、N領域、ボーサイン鉱山、ソントー鉱山	日本語
論文	籾の貯蔵・脱穀・脱稃方法にみられる穂摘み頴稲と高刈り稲穀の間の違い:東南アジアの文化間比較に基づく民族誌モデルの提示	小林 正史(北陸学院大学) 村上 由美子(京都大学)	25-42	東南アジア民族誌において穂摘み頴稲の貯蔵、脱穀、脱稃の方法の特徴を明らかにするために、穂摘みと根刈りの民族誌を比べた。その結果、1 脱粒しにくい米品種を多用する島嶼部の伝統的水田稲作では「穂摘みした頴稲を高床倉庫に貯蔵し、随時取り出して臼杵による脱穀、脱稃・精米を連続して行う」、2 穂からの脱粒性が極めて高く、登熟時期が不揃いな品種を多用する山地焼畑民では「穂摘みした頴稲をその場で踏みつけ法か叩きつけ法で脱穀し、稲穀(殻つき籾)で貯蔵する」、3 他の多くの高刈り・根刈り例では、登熟時期が斉一的で比較的脱粒しやすい品種を用いるため「収穫直後に全ての稲を踏みつけ法か叩きつけ法で脱穀し、稲穀で貯蔵する」という、米品種の特徴に応じた違いがみられた。	穂摘み、高刈り、頴稲、脱穀、脱稃、臼杵	日本語
論文	台湾考古学における外部的影響と内部的発展をどのように考えるか?-鹿野忠雄「原ドンソン文化」と三和文化を事例として-	俵 寛司(国立台湾大学)	43-58	本稿では、かつて鹿野忠雄(1906-1945)により台湾先史時代の文化層の一つとして提唱された「原ドンソン文化」("Proto Dongsonian Culture")に関する学史的検討と、台湾東部先史時代の考古学的文化である三和文化および三和文化中期(1980BP-1420BP)とされる台東県金崙遺跡の発掘成果を事例として、台湾考古学における外部的影響と内部的発展をどのように考えるかについて論じる。	鹿野忠雄、原ドンソン文化、三和文化、台湾考古学、外部的影響/内部的発展	日本語

研究ノート	ジャヤヴァルマン7世期における統合のイデオロギー -観音像と「仏の花飾り」-	宮﨑 晶子(茨城キリスト教大学)	61-71	本稿は「毛孔に天人をあまた宿す」観音像に焦点を当て、ジャヤヴァルマン7世期における統合のイデオロギーを明らかにすることを目的とする。筆者の調査から、本像は領域の中央のみならず周縁からも発見されることが分かっている。このことから、本像はアンコールにおいて統合の役割を担っていたと考えられる。本像の典拠は『カーランダヴューハ』第2部第2章「毛孔の描写」であり、本章は『華厳経』の影響を受けている。『華厳経』のメインテーマは「相即相入（anyona-samavasaraQa, interpenetration）」、「包摂（samavasaraQa, gathering of all）」である。観音はアンコールにおいて、矛盾や衝突のない統合体としての融合を説いている。	『カーランダヴューハ』、『華厳経』、「入法界品」、観音、統合	日本語
研究ノート	近現代の琉球諸島および台湾におけるセメント瓦	波多野 想(琉球大学) 山極 海嗣(琉球大学) 武島 早希(琉球大学)	73-84	近現代琉球諸島及び台湾の景観を特徴づける要素のひとつにセメント瓦がある。セメント瓦は、日本では明治末期から大正初期にかけて発祥したとされ、その後に植民地下の台湾に技術移転された。さらに台湾から沖縄本島に伝播した後、琉球諸島全域へと波及し、各地の瓦工場がそれぞれに個性的な装飾を備えた瓦を生産した。すなわち、セメント瓦は、近現代の琉球諸島及び台湾におけるモノの生産・技術・流通等を読み解くための有効な資料のひとつといえる。そこで本稿は、近現代の琉球諸島および台湾において、物質文化が伝播・進化するメカニズムの一端を解明するうえで顕著な事例としてセメント瓦があることを示し、その歴史的実態について整理する。	セメント瓦、島嶼研究、琉球諸島、台湾、物質文化	日本語
調査速報	宮古島クバカ城跡 調査概報	石井 龍太(城西大学) 本村 麻里衣(アーキジオ) 阿部 常樹(国学院大学) 角道 亮介(駒澤大学) 深山 絵実梨(立教大学) 高橋 怜土(国学院大学)	87-91	本稿の執筆者の一人である石井は、元々琉球諸島の近世集落に関心を寄せ各地で学術発掘調査を実施してきた。そして近世琉球期に先行するグスク時代の集落遺跡との関係を考古学的に明らかにする必要性、また沖縄島中心の政治史的な琉球国史から距離を置き、先島諸島と民衆を含めた琉球史として捉え直す必要性を考えるに至った。宮古島には石積みを伴う特色ある遺跡群が分布する。いわゆる「グスク」の地域例として捉えられてきたものの諸点で異なり、この問題提起に大いに資すると期待されよう。具体的な調査対象として、宮古島南部に位置するクバカ城跡(図1)を取り上げた。近世琉球期の文献資料にも登場し、宮古島の同種の遺跡のうち、石積みがほぼ全周保存された貴重な事例である。現在は宮古島市の指定文化財となっている。本稿は2022年5月に実施したクバカ城跡の第1次調査について述べるものである。	宮古島、グスク時代、石積み、城跡、集落跡	日本語

展望	東南アジアの古代都市遺跡についての、私の疑問	上野 邦一(奈良女子大学)	95-98	昨年、東南アジア考古学会の年度大会の際、研究大会を持った。研究大会に参加できなかった私は、後日、発表者に当日の発表資料を送って貰った。なぜ、そのような依頼をしたかと言うと、東南アジアで発見されている古代都市についていくつかの疑問があり、その解明の糸口を得たいと思ったからである。私の疑問は主に3点である。1)アンコール・ボレイとオケオの関係、2)イーシャナプラほか、いくつかの都市の形状、3)都市内の核となる施設。これらの疑問は解決していないが、若い研究者が将来、私の疑問を解明することを期待して、書きとどめることにしたのが、本拙稿である。	古代都市、東南アジア、都市の形状、都市の中心区画	日本語
書評	『A History of Maritime Trade in Northern Vietnam, 12th to 18th Centuries: Archaeological Investigations in Vandon and Phohien』Yuriko Kikuchi 著、2021年	田畑 幸嗣(早稲田大学)	101-102			日本語
書評	『アジアの博物館と人材教育-東南アジアと日中韓の現状と展望』山形 眞理子・徳澤 啓一 編著、2022年	杉山 洋(龍谷大学)	103-105			日本語
書評	『図説 世界の水中遺跡』木村 淳・小野 林太郎 編著、2022年	野上 建紀(長崎大学)	106-108			日本語
マングローブ通信	台湾研究滞在記(2021年8月~2022年7月)	俵 寛司(国立台湾大学)	109-110			日本語
マングローブ通信	追悼 日越共同考古学調査の懸け橋―ハン・ヴァン・カン教授	菊池 誠一(昭和女子大学)	111-112			日本語
マングローブ通信	追悼 チャンパー、扶南考古学の開拓者―ルオン・ニン教授	菊池 誠一(昭和女子大学)	113-115			日本語

種別	タイトル	著者	掲載ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	13世紀末~16世紀アンコール・トムの上座部仏教寺院建造時期に関する検討	下田 麻里子(早稲田大学)	5-23	アンコール王朝末期の君主らは、それまでのヒンドゥー教、大乗仏教にかわり新たに上座部仏教を導入することで、来たる「交易の時代」にむけた国家構造の変革を試みようとしたと考えられる。本稿の狙いは、アンコール王朝の王都アンコール・トム内で13世紀末頃から16世紀にかけて建造された上座部仏教寺院の建造時期を検討することで、同都市の上座部仏教都市化における都市構想とその過程を明らかにすることにある。分析手法として、アンコール・トム内の上座部仏教寺院を対象とした類型学的分類を行い、各分類に属する遺構の基壇繰り型やセーマストーンから、分類ごとの建造年代を検討した。さらに、13世紀末から16世紀のアンコール・トムの3つの時期区分について整理した上で、同都市内の上座部仏教寺院の概略的な編年がこれらの時期区分とある程度の対応関係をみいだせることから、王都アンコール・トムが段階的に上座部仏教化していく様相について提示した。	Cambodia, Angkor Thom, Theravada Buddhist Monasteries, Typological Classification, Chronology	英語
論文	遺跡の「真正さ」を探る:アンコール遺跡群バンテアイ・クデイの近現代史	丸井 雅子(上智大学)	25-40	バンテアイ・クデイはアンコール期(802-1431)の12世紀末頃建立された大乗仏教寺院遺跡であると解釈されている。アンコール期の寺院建築群は、近代以降は伝統的本質へ回帰する文化表象として扱われ、1992年の世界遺産登録がそれを強化する。特に現代においては遺跡と地域住民を「伝統」や「文化景観」といった概念で一括りにするが、本稿はそうした本質主義的見方への批判を出発点として、バンテアイ・クデイと地域住民に焦点を当て考古資料と語りに基づいて両者の歴史的関係を動態的に捉え直す。そこから見えてくるのは遺跡をめぐる近現代史であり、人々の記憶が生きている場としての遺跡のもう一つの「真正さ」である。	歴史地域学、遺跡の「真正さ」、考古学、オーラル・ヒストリー、アンコール	日本語

論文	稲作農耕圏の民族誌における火処タイプの選択理由	小林 正史(北陸学院大学)	41-56	稲作文化圏における伝統的火処タイプの選択理由を解明するために、東南・南アジアの火処民族調査と東アジアにおける文献調査を組み合わせて火処の地域間比較を行った。その結果、火処タイプ(煙道付カマド、煙道なしカマド、三石・五徳炉、自在鉤炉、七輪)の選択理由として、以下のように、暖房、主食調理法、家屋構造、燃料の種類などが重要であることが示された。第一に、暖房機能が必要な地域では、鍋を吊る(自在鉤)炉や煙道付カマド(特にオンドル・炕)が用いられる。第二に、薪燃料が希少な地域(南アジア)では、熱が逃げにくい小型カマドが用いられる。第三に、高床建物ではカマドを置けないため、三石炉が選択される。最後に、主食調理法については、側面加熱蒸らしを伴う湯取り法炊飯は蒸らし時に側面加熱ができる三石炉、長時間強火加熱が必要なウルチ米蒸し(中国南半、ジャワ)や短時間強火加熱が必要な炊き干し法(中世以降の日本・韓半島)はカマド、という結びつきが観察された。	火処、イロリ、カマド、主食調理方法、暖房の必要性	日本語
論文	東ミクロネシアにおける人類の移住年代と貝利用―ポーンペイ島での最近の発掘成果より	小野 林太郎(国立民族学博物館) 山野 ケン陽次郎(熊本大学) 片岡 修(上智大学) Jason Barnabas(ポーンペイ州歴史保存局) 長岡 拓也(NPO法人パシフィカ・ルネサンス) 片桐 千亜紀(沖縄県立埋蔵文化財センター) 山極 海嗣(琉球大学)	57-72	ポーンペイ島を含む東ミクロネシアへの人類移住は、約2000年の間に西ミクロネシア、メラネシア、あるいはポリネシア方面など様々な方向から行われてきた痕跡がみられ、複雑な様相を示している。しかし、初期居住は、言語学的にはメラネシア方面を中心に大まかに南から北の方向に向かう移住が主となったと考えられ、考古学的にもその可能性を示す痕跡が発見されつつある。本稿では、こうした可能性を検証するために2019年から開始したポーンペイ島での発掘調査とその成果について、その初期居住年代とミクロネシア内での地域間比較を行う上で考古学的に注目されてきた貝製品をふくむ貝類の利用に関する新たな資料を軸に、東ミクロネシアへの初期の人類移住とその物質文化や貝利用の特徴について総合的に論じる。	ミクロネシア、初期移住、ポーンペイ島、貝利用、CST土器	日本語

研究ノート	古代中世クメール史の動態検証における古気候復元データの利用にかかる諸問題	下田 一太(筑波大学)	75-92	古代中世クメール史の舞台であったインドシナ半島の古気候復元や、アンコール遺跡群の古環境復元に関する研究が近年進展している。こうした古気候や古環境復元の成果は、歴史学に新たな観点をもたらしているが、これまでのところアンコール時代後期の王朝衰退に関係した文脈での考察に傾斜しており、アンコール王朝の成立時期や、プレ・アンコール期に遡るクメールの通史的な動態解釈に援用した研究事例は限られている。本稿では、プレ・アンコール期以降の刻文、寺院、水利施設造営の時代的な推移をアンコール王朝の支配機構の集権力の指標とし、古気候復元データとの相関を検証することで、そこに一定の有意な関係が認められることを示すとともに、アンコール王朝の消長の動態については複雑な諸条件の因果を考慮する必要があり、古気候復元データの利用にあたっては多様な課題があることを論じるものである。	クメール、アンコール文明、古気候、古環境	日本語
研究ノート	サピエンスによる更新世期の島嶼移住と渡海に関する一考察:ウォーレシア・琉球列島における事例から	小田 静夫 小野 林太郎(国立民族学博物館)	93-109	アフリカを起源とする現生人類(ホモ・サピエンス)は、後期更新世にはアジア圏の熱帯・亜熱帯島嶼部へ拡散した。このうちサピエンスによる最古の渡海事例として知られるのが、東南アジアに広がるウォーレシア海域におけるサピエンスの渡海や島嶼移住である。サピエンスはさらに5万年前頃までに約80キロ以上の渡海により、オセアニア圏となるサフル大陸(現在のニューギニアやオーストラリア)への移住にも成功した。一方、東アジアでは4万年前頃までには日本列島で旧石器時代遺跡が出現し、3万年前までにはその南に広がる琉球列島の島々にも痕跡が出現する。特に近年、石垣島で2万8000年前頃に遡る複数の更新世人骨が発見されたことは、南方方面からの移住があった可能性も示唆している。本稿ではこれら近年における新たな発見を踏まえつつ、更新世期のサピエンスによる渡海方法や島嶼移住の文化的背景について、ウォーレシアと琉球列島における事例を対象に、現時点での総合的な比較検討を試みる。	サピエンス、更新世、渡海、島嶼移住、ウォーレシア、琉球列島	日本語

研究ノート	東南アジアの宗教考古学研究序論 ―世界宗教を対象として―	坂井 隆(国立台湾大学)	111-128	現在東南アジアのほとんどの地域ではさまざまな宗教が熱心に信じられ、人々の最も重要な精神的拠り所となっている。その状態は先史時代以来続いており、特に歴史時代の大規模遺跡の大部分は宗教関連のものである。そのため日本考古学とは異なって、東南アジア考古学では宗教考古学とは、決して特定の研究分野ではなく、文化史を物質的証拠で探る試みと言える。それをどのように日本の研究者は考えたら良いのかという点について、主に世界宗教に関する事例の礼拝建物・遺物と埋葬遺構から原則的な事柄を提示してみたい。	宗教考古学、世界宗教、礼拝建物遺構、埋葬遺構、礼拝遺物	日本語
書評	『ものがたる近世琉球－喫煙・園芸・豚飼育の考古学』石井龍太著、2020年	宮城 弘樹(沖縄国際大学)	131-132			日本語
マングローブ通信	追悼　ベトナム考古学の開拓者－ハー・ヴァン・タン教授	菊池 誠一(昭和女子大学)	133-136			日本語
マングローブ通信	台湾研究滞在記(2020年9月~2021年7月)	俵 寛司(国立台湾大学)	137-140			日本語

種別	タイトル	著者	掲載ページ	要旨	キーワード	記載言語
論文	カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群都市区出土土器の研究	横山 未来(早稲田大学)	5-20	カンボジア中部、コンポン・トム州に位置するサンボー・プレイ・クック遺跡群は、土塁に囲まれた都市区とレンガ積祠堂が立ち並ぶ寺院区から構成される複合遺跡群である。同遺跡群は、『隋書』真臘伝や『大唐西域記』にみられる伊奢那城あるいは伊奢補羅国、すなわちクメール刻文で言及されるイーシャーナプラに比定されており、プレ・アンコール時代の真臘の王都として繁栄したとされる。本稿では、同遺跡群における都市の利用年代とカンボジアの土器変遷について考察を行うが、2015年に行われた都市区M90地点の発掘調査では、豊富な遺物が出土し、3期にわたる土器様相の変遷が見られた。また、同じ文化圏に属する遺跡の出土遺物との比較により、回転台の導入に代表される陶製技術の進展が、器種や器形の変化に影響を及ぼしたことも指摘できる。	カンボジア、プレ・アンコール時代、サンボー・プレイ・クック遺跡群、土器	日本語
論文	現代のモノの移動と考古学：あるバンチェン土器の事例から	田代 亜紀子(北海道大学)	21-33	バンチェン遺跡(タイ)は、タイの代表的な先史時代の遺跡である。1960年代の発見、1970年代の発掘に続き、古美術商により、バンチェン土器といわれる土器の取引がおこなわれ、多くが国外に流出すると同時に偽物も登場した。土器のような可動遺産は、世界中の博物館に対する文化財返還問題が起きている近年の状況では、より複雑かつグローバルな問題として取り扱われてきた。本稿では、1970年代に日本に持ち込まれた2点の伝バンチェンといわれる土器を対象とし、個人に所有されていたモノが、どのようにヘリテージとして認識されていくのか、現代におけるモノの移動と考古学の関係性を考察する。	モノの移動、考古学、パブリック・アーケオロジー、バンチェン土器	日本語

研究ノート	マレーシア・クダ州カンポン・バル寺院遺跡出土の貿易陶磁	森 淳子(マレーシア国民大学)	37-53	マレーシア・クダ州カンポン・バル寺院遺跡は、同国の原史時代を代表するブジャン谷遺跡群内にあり、地元研究者は仏教寺院と推定している。2016、17年の発掘調査で出土した貿易陶磁片1,371点を産地別にみると、中国が50%、ペルシャが18%、ベトナムが6%、タイが2%で、ペルシャ陶器の比重が2番目に高かった。大宰府の貿易陶磁編年に基づく分析では、全体の61%で同編年が利用でき、うち21%は8世紀後半から10世紀中頃、25%は11世紀後半から12世紀後半で、14世紀後半以降は大幅に減少していた。これらの分析から同遺跡を含むブジャン谷は、中国とペルシャを結ぶ貿易ネットワークの1拠点で、8-9世紀から14世紀頃までの長期にわたり利用されていたと考えられる。	マレーシア、ブジャン谷、貿易陶磁、ペルシャ陶器	日本語
研究ノート	現代タイ社会における「考古学」と遺跡の保存	白石 華子(京都大学)	55-69	本稿は現代タイにおける考古学の営みの全体像を明らかにし、またそれが遺跡保存においてどのような指向性を持つのかという点について予察的な検討をおこなうことを目的としている。初めにタイの考古学について歴史的背景や組織体制、教育、法制度の面から検討し、「考古学」と呼ばれる営為の範囲や中身について基本的な整理をおこなう。またその中心的アクターである文化省芸術局とシンラパコーン大学が近年おこなった遺跡保存の実例を示し、両者の遺跡保存に対する姿勢やその特徴、課題、そしてその背景にある政治・経済・学術的要因について考察することで、タイにおける考古学と遺跡保存の関係の一端を明らかにする。	タイ、考古学、遺跡保存、芸術局、シンラパコーン大学	日本語

資料紹介	ラオス・ヴィエンチャン旧都城内出土の初期伊万里	清水 菜穂(Lao National Museum)	73-79	It is well established that Japanese Hizen ceramics were exported in large amounts to Southeast Asia during the second half of the 17th century. In Mainland Southeast Asia, Hizen porcelain fragments have been recovered from many archaeological sites in Thailand, Vietnam, Cambodia, and the Lao PDR. However, the number and volume of Hizen's earliest porcelain or so-called "Early Imari ware", produced during the 1630~1650s is yet very few. Vientiane was established as Lao's capital of Lane Xang in 1560. A large-scaled excavation survey was undertaken recently in the old city of Vientiane to find 285 pieces of Hizen ceramics in total. My detailed analysis confirms the four specimens of "Early Imari ware" among them. How were Japanese earliest porcelains transported and brought into this inland, remote and small capital? This brief paper reports their attributes and characteristics as well as discussing archaeological insights, in terms of foreign ceramic trade in Mainland Southeast Asia.	Early Imari ware, Hizen porcelain, Trade ceramics, Lane Xang Kingdom, Vientiane	日本語
書評	『ヒトはなぜ海を越えたのかーオセアニア考古学の挑戦ー』秋道 智彌・印東 道子 編著、2020年	江上 幹幸(沖縄国際大学)	83-86			日本語
マングローブ通信	コロナ禍で行われた若手研究者によるオンライン勉強会	東南アジア考古学オンライン勉強会	87-89			日本語